

# 市民研会員から募集！ 2012年 私のおすすめ3作品

締め切り 2013年2月25日、到着順に掲載

## ● 杉野 実

### 1◆「コーヒー講演会」(3月・市川市動植物園)

千葉県白井市にある「遠山珈琲店」のご主人が、楽しい蘊蓄をかたむけてくださっただけでなく、実際においしいコーヒーもいれてくださいました。エチオピアの「コーヒー儀式」カリモアンのことや、ブラジル最高級のコーヒー豆が「ナンバー2」である理由など、歴史文化的な話も勿論おもしろかったですけど、意外に新鮮だったのが、うまいコーヒーのいれかたをめぐる自然科学的な話題です。たとえばフィルターには、あついお湯を一度にそそいではいけない。これは各成分の温度による溶解度のちがいで、苦味分が熱湯にとけやすいからだそうです。コーヒーには熱伝導率が最高である銅器が最適ともいいますが、一番おもしろかったのは「コーヒーの粉はふくらむ」という話でした。加熱されると香り成分がガスとなってまず粉の内部に充満する！新鮮なコーヒーほどこの効果は顕著だそうです、ああおどろいた。

### 2◆「証券マンである高校の同級生と議論」

私の高校同級生は市民科学研究室をいろいろとさわがせていますが、ここで言及する人物はおそらく初登場です。ことのおこりは、「証券と債券の市場がことなる動きをした際には、債券市場を信用した方がいい」という意味の文言が、新聞の記事にあったことですね。「債券市場は証券市場よりも合理的」とは一体どういうことなのか、無類の議論ずきでもあるくだんの同級生にきいてみたのですよ。2か月ほどにわたり断続的につづいた議論の途中で、「模擬証券市場を計算機でシミュレーションしている」大学の先生が話題になる、といったエピソードもありました。結論をのべますと、結局のところ「(株価がその指標となるべき)企業の収益力なんてものは、どうしても合理的にはかりがたい」ということですね。業績に関係なく利子が入る債権の方が投資家にとって「合理的」、つまり企業には「非情」ってわけです。

### 3◆NHK連続テレビ小説「純と愛」

みなさんもよくご存じでしょう、「朝ドラのわくをふみはずした」として、賛否両論おおいにまきおこしている「おさわがせのドラマ」です。つつこみどころ、いやみどころは多岐にわたるのですが、ここではもっぱら一点にのみしぼって論じましょう。朝ドラのつねとして主人公は(一応)女性なのですが、実質的な主人公ともいえる彼女の夫がなんと、「人の本性がみえる」特殊能力をもっているのです。そんなかれが精神病院で診察をうけ、「薬で妄想・幻覚をおさえる」統合失調症の治療をさせられたのですが、さてこれはもっとも適切な医療行為だったのでしょうか。自分が精神科医ならどうするか？PSIめいた「特殊能力」の真偽は一旦おいといて、『『本性が見える』ことをきみはいいわけにしていないか？』と僕なら問うかなあ。むしろパーソナリティ障害の治療が必要じゃないのか、なんて思ったのです。

## ● 吉岡 寛二

## 1◆内田樹、中沢新一『日本の文脈』（角川書店）

いわゆる『日本人論』には、学生時代から興味があつていろいろと読んできました。この本は対談集で、2009年4月から2011年5月にかけて、いろいろなところで行われた対談をまとめたものです。対談集というのは「議論対象に関する自分の意見」だけでなく、対談者の性格や二人の関係を推察できたり、一人では話の展開としては面白くないことが、掛け合いによって楽しくすることができるので、私は大好きです。

この本に関連しますが、内田樹『日本辺境論』（新潮新書、2009年）も面白いと思います。

## 2◆橋本大三郎、大澤真幸『ふしぎなキリスト教』（講談社現代新書）

『宗教（三大宗教・ユダヤ教・神道など）』にも学生時代から興味があるのですが、キリスト教について、これほど「明確に」「わかりやすく」説明している本に巡り会えたのは初めてです。お二方とも社会学者であり、大筋としては大澤氏が質問し橋本氏が答えるという形、いわゆる Q&A のような感じになっています。大澤氏が非常に的確な質問をしながら、橋本氏から明快な答えを引き出して、全体を構築していくというやり方は秀逸です。内容は三部構成で、第1部「一神教を理解する」、第2部「イエス・キリストとは何か」、第3部「いかに『西洋』を作ったか」になっています。

私は18年前に、『科学という名の信仰』という原稿を書いて出版社に送ったことがあるのですが、自分の感じ方はおかしくなかったと思って、気を良くしています。

（西洋自然科学は、God の存在証明をしようとするところから始まったのですが、啓蒙思想によって God を必要としなく（理性が God を肩代わりするように）なったと書かれています。「（理性を信仰している）西洋科学」が「（イエスを信仰している）キリスト教」に置き換わっただけと考えれば、「科学」も「信仰の一形態」と言えるのではないのでしょうか。）

※昔から「信じる」ことが一番大切と思っていますから、「科学の力」を再認識しているということです。

## 3◆植木理恵『ネガティブな自分をゆるす本』（大和出版）

会社の同僚が、この本を読んで作成した「マインドマップ」をメールしてきたので、興味を持ちました。特に、企業では「ポジティブ・シンキング」という言葉に対しては、「疑問を持つことすら悪」という感じですが、しかし、心理学者・臨床心理士の立場からは、「ネガティブなことを肯定する」ことからスタートするのは当然のことかもしれません。「ポジティブ・シンキング」に異を唱えているので、一票という感じです。

※最近読んだ、臨床心理関係の本はこの一冊だけでした……でも、いい本かも知れません。

私がこの会に入会したのは、電磁波リスクについて古くから取り組んでおられる上田さんに共感したからです。電磁波による、（客観的な）肉体的・身体的被害も重要ですが、発達障害やうつ病などの精神疾患も看破できない大きな問題だと思います。こういうことを明らかにしていく上でも、精神疾患を「社会が隠そうとしない」「社会が本人のせいにしない」ことが求められているのではないのでしょうか。

著者は、さんまの『ホンマでっか!?TV』に出演していることで有名です。講演会を何度もキャンセルするなど、バッシングも絶えないのですが、自分自身のうつを知るため・対処するために、このような道を志したのかもしれない。

## ● 権上 かおる ～博物館・美術館編として～

### 1◆ヤマザキマザック美術館（名古屋・新栄町）

18世紀から20世紀のフランス美術を中心とした美術館。工作機械メーカー現ヤマザキマザック会長がほぼ一代で収集したコレクション。工作機械では後発メーカーにあたり海外展開するしかなかったという事情のため、1年の3分の2は海外という生活の中、唯一の楽しみは、現地の美術館巡りだったとか。私が最初にこの館へ行ったとき、「ああここは、ニューヨークのフリックコレクションを手本にしているなあ」と思いました。ガラスケース・カバーのない展示、案内は番号だけで入場料に含まれるイヤホンガイドで、絵の解説を聞きながら観賞していきます。ピッツバーグの鉄鋼王だった私邸を使ったフリックコレクションが、この方法であたかも私邸に招かれて観賞するような美術館を目指したそうです。ヤマザキマザック美術館は高層ビル内なので、私邸という感覚は薄いですがガラスを通さない絵画は一味違います。なかでも工作機械の社長さんだけあって、立体物が素晴らしい。家具調度についてもヨーロッパのものとは思えない日本的な好みで収集されています。1室をしめるエミール ガレのガラス器には、質・量ともに、どなたでも圧倒されることでしょう。地下鉄駅の真上なので、名古屋に所要で行った隙間時間でも楽しめることもうれしいです。

### 2◆ローマ・ゲルマン博物館（ドイツ・ケルン）

ケルン大聖堂のすぐ隣、ローマ時代の遺跡が発掘された場所に建屋を作り博物館にしたそう。地下一階の発掘されたモザイク床を中心に設計されています。博物館内から大聖堂の横面の眺めも角度がいいのか圧倒されます。展示は、まさに「モノに語る」博物館の王道を行くものです。ガラス器、陶器などの修復もきれいで、石材の解説等も工夫がなされていました。館内は小学校低学年から高校生位までのグループ見学が多く、それぞれ先生の解説を聞きながら熱心にメモをとる姿が多かったです。

### 3◆史跡 尾去沢鉱山（マインランド尾去沢）（秋田県・鹿角市）

江戸時代は金、明治以降は銅の採掘、現在の三菱グループの基礎をつくったと言われる鉱山跡の見学施設です。浅熱水鉱床という縦に鉱脈が走っているため、坑道を作らなくて採掘できたという省エネタイプの鉱山にびっくりしました。学会の行事として参加したため、いかにも鉱山マンといえるガイドさんの説明も熱も帯びました。秋田県といってもいちばん岩手に近い内陸部にあるため、到着するまでが大変ですが、機会がありましたら一見の価値のあるお勧めの施設です。

## ● 山田 耕作

## 1◆ 「低線量汚染地域からの報告—チェルノブイリ26年後の健康被害」

馬場朝子、山内太郎著 NHK出版 1400円＋税

はじめに「科学的」ということについて述べる。正確な絶対に間違いのないデータを科学的という人がいる。しかし、人間が測定するのであるから誤差もあり、考察に間違いがあるかもしれない。人間は絶対的な真理を知ることはできない。常に相対的である。しかし、人類の科学が継続されていくなれば、限りなく真理に近づくことは可能である。

科学は細分化し分析することによって個々の現象を正確に知ることができる。しかし、科学で大切なことは分析によって最先端を知ることだけでは科学的でないことである。分析と同時に総合化、「分析と総合」が車の両輪のようにすすめられなければならないのは本当の真理の全体像はつかめないのである。放射線被曝や原発の安全性とその是非はこのような総合的な判断が不可欠である。それ故、専門家の判断より、一般市民の方が総合的な点で優れておれば正しいこともあり、ここに市民科学の意義の一つがあると思う。特に被曝被害の疫学調査は経済的にも技術的にも市民には難しい。それ故、国家や加害者がそれを隠蔽する時、原発事故の被害の真理は如何にして知ることができるかが問題である。我々は個々の部分の報告から、全体像を総合的に考察することによって獲得しなければならない。その欠点を批判し、否定するのでなく、不十分な個別の報告から真理を見つけ出すために協力しなければならない。これ以外に科学的な方法はない。そのような苦労の結果得られた貴重な報告の例を以下と最後の3の文献で紹介する。チェルノブイリ原発から140キロの町の被曝被害の実態報告

「その小児甲状腺がんを、IAEAがチェルノブイリ事故の影響と認めたのは、1996年だった。しかし、ウクライナの医師たちは1980年代の終りには異変に気が付いていた。……連科学アカデミーのレオニード・イリイン博士も『そんなことはありえない』と言い、IAEAも認めませんでした。患者数が増加したのは、超音波診断など診断装置がよくなったので発見率が上がったからだと言われたのです」(P129-130)

「言語力や資金力、国力といった要素が、世界において「科学的証明」には必須なのだ」。(P133)

「ウラジミール・ブズノフさんが報告した心臓疾患に関して、国際機関は研究過程に不備があると指摘した。そして、健康被害には放射線だけでなく、ストレスなどの影響があると指摘した」。(P137)

「彼らは『影響があるというなら、あなた方は証明してください。もっと証明してください。まだこの件に関しては研究調査する必要があります。さらに研究する必要があります』と常に言うんです。……研究中なら、まだ明確になっていないのですから、人々が心配する必要がない。というわけなのです」。(P138)

「科学的」という観点からは一点の曇りもないデータが求められるだろう。しかし、人間という生物には寿命がある。科学の証明を待っている、個人の寿命が先に尽きてしまうこともある。今回、ウクライナの報告書に記されている様々な疾患への放射線の影響が国際的に合意されれば、少なくともより広範な経済的支援を受けることが出来るだろう。そして、新たな健康被害を生まない対策をとることもできるだろう。科学は、まだまだ人間という複雑な存在を解明できていない。完璧な美しき証明より、不完全でも人間にやさしい科学の取り扱い方が必要なのではないだろうか。」(P139)

「1989年、ウクライナの医師たちが「子どもの甲状腺がんが増えている。チェルノブイリの影響ではな



いか」といった時、その言葉の中に真実はなかっただろうか。ウクライナの医師たちの研究の不備を指摘するなら、国際機関は、現場の医師たちの言葉の中の真実を、それはまだ小さな真実のかけらかもしれないが、明らかにする手助けをするべきではないのか。その研究成果はウクライナだけでなく、これから同様の経験をするかもしれない世界中の人たちにとって、大切な財産となるのではないか。」(P145)

## 2◆「震災後の自然とどうつきあうか」 鷺谷いづみ著 岩波書店 1800円 2012年

### 生態学に基づく東北の真の復興を訴える

保全生態学者鷺谷いづみ氏は東北地方の大胆な復興計画を提案している。それは生物多様性の保全と持続可能な利用、および生態系から人間社会に提供される便益である生態系サービスを重視する立場に基づいている。大規模な構造物で守らなければならないような災害に脆弱な土地は「災害への緩衝空間」とし、同時に多様な生態系サービスを楽しむための、生態系・生物多様性を生かす空間として利用する。すなわち、大規模攪乱が起こっても災害を起こさないように、災害の可能性が大きい場所には住まない、そこでの活動は一時的なものに限る戦略である。私はこの提案が決定的に重要であり、それに反する政府の「復興」の方針は根本的に間違っていると思う。例えば高い防波堤で海と陸との間の境界を築くことは本質的な解決にならないばかりか、生態系のつながりを遮断する。

## 3◆「放射能汚染が未来世代に及ぼすもの—「科学」を問い、脱原発の思想を紡ぐ」 綿貫礼子編 吉田由布子、二神淑子、リュドミラ・サアキャン著 新評論 1800円 2012年

「女性の視点によるチェルノブイリ 25年研究」という本書は私のような男性では気が付かない、女性や母親の目を通して見たチェルノブイリ事故の被害の報告である。「チェルノブイリ被害調査・救援」女性ネットワークを通じての活動報告でもある。

「女性ネットワーク」は事故から10年を過ぎた1990年代半ば頃には、チェルノブイリの汚染現地で子ども達に起きているガン以外の多様な病気の広がり大きな懸念と疑問を持つようになった。(p4) 綿貫さんは続けて「直接事故に遭遇した子ども達はもとより、事故の後に受胎して享けた子ども達にその健康被害が広がっていること、その要因には女性の生殖健康が侵されているのではないかと推察された。私のもっとも心配していたことであった」。「その健康異常がフクシマで繰り返されないためにも、私たちがリアルタイムで見てきたチェルノブイリでおきている事実、私たちが考察してきた放射線、とりわけ放射性セシウム137の体内蓄積の影響について、急いでまとめなければならないと痛感したのである」。

その結果次の仮説にたどり着いたという。「①セシウム137の体内蓄積による放射線の内部被曝によって、エピジェネティックな変化(遺伝子の配列ではなく発現が変わる変化)が生じる。その結果、女性の生体内でホメオスタシス(恒常性)のアンバランスを介して生殖の健康が損なわれる。②その女性が妊娠した時、胎児は子宮内に蓄積しているセシウムによって被曝し、発生の重要な時期にエピジェネティックな変化が生じ、生後の外的要因(新たなセシウムの外部・内部被曝を含む)に対して非常に脆弱となり、病気に罹りやすい体質となる。」(P88)

この仮説によれば同じく遺伝子の発現作用を攪乱する化学物質や電磁波による複合作用が自然に理解できる。

## ● 白井 基夫 (『週刊金曜日』編集部)

<前口上>

当初の目論見では、本を3点、紹介するつもりでした。しかし、どうしてもモノの紹介だけでは収めきれないと思い、以下のようにまとめました。原発関係は、ほかの方にお任せして……♪

## 1◆実証研究の醍醐味

・武石典史 (著)『近代東京の私立中学校 上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房、2012年3月、6300円 (税込み)

・平良勝保 (著)『近代日本最初の「植民地」沖縄と旧慣調査 1872-1908』藤原書店、2011年11月、7140円 (税込み)

前者では、「なぜ上京なのか」「なぜ東京なのか」という素朴な疑問から説き起こす。他の中学校からの退学者などの「敗者復活戦の場」として私立中学校。教育制度の文化的背景まで描かれ、明治期に「受験知=近代学知」を用意したのは東京府立中学校ではなく、私立中学校だったことがよくわかる。

後者は2011年出版だが、年末なので昨年のもつと見なして。沖縄は、近代日本が成立する過程で他の行政区とは異なり、「旧慣温存」が行なわれた。つまり、琉球・沖縄には植民地として扱われてきた歴史があるので、「近代沖縄の研究は、日本の植民地研究に資するところが大きい」と著者が書いているとおりののだ。現在の沖縄問題の根っこが、はっきり浮かび上がる。これは「歴史認識問題」といえる。

2点ともに、資料やデータの分析をていねいに積み重ね、精緻さを維持しつつ、スケールの大きな研究成果を得ている。こういう研究書は骨組みがしっかりしているうえ、迫力が伝わり、興奮さえ覚えるものだ。それぞれの著者には専門分野があるけれども、その近接領域にも影響を与えるだろう。

## 2◆小沢昭一さんの逝去

12月10日、亡くなった。実はこの日、永六輔さんの新刊の校了日だった。それもあって、訃報に非常に驚き、悲しみに襲われた。しかも、あとから漏れ伝わってくるのは「自死」との情報。おもしろ好きの小沢さん、楽しみがなくなってしまい、病院で死ぬのもイヤだと思って「選んだ」のではないかと想像しているが。

その実績は、ラジオ番組「小沢昭一的ころ」が約40年にわたって放送されたこと、俳優として活躍したこともあるが、ぼくとしては、放浪芸の記録・実演、芸と仏教の「交差点」の発掘、という2点をあげたい。「芸能と差別」の視点も、ぶれることがなかった。余人をもって代えがたい業績。

参考 (小沢さんの著書) : 『ものがたり芸能と社会』『日本の放浪芸』『珍奇絶倫 小沢大写真館』『小沢昭一座談 本邦ストリップ考 まじめに』 \* 『芸人の肖像』という新刊が2月に出るらしい

## 3◆高部知子さんインタビュー

テレビには数年前からたまに出て、いわゆる「ニャンニャン事件」(1983年6月)が「事件」としてはほとんど何もなく、メディアや社会が好奇のまなざしで根掘り葉掘り取り上げた「騒動」にすぎなか

った、と説明してきた彼女。しかし、紙媒体に対しては、沈黙したままだった。その最初が、ぼくのインタビュー。彼女の言葉はどれも重かった。ぼくはたくさんのことを教えてもらった。特別に、市民研のメンバーの方限定で、彼女の言葉を断片的ながら紹介しておきたい。

なお、彼女は1967年8月生まれ。ドラマ『積木ぐずし』、バラエティ番組「欽ちゃんファミリー」で国民的人気を得た元・女優、タレント。30代で慶應大学に入学・卒業。現在は、厚生労働省管轄の国家資格・精神保健福祉士として活動。認定心理士でもある。

「精神保健福祉士の使命は、心神喪失状態で凶悪犯罪に関わった人、精神疾患を抱える人、薬物中毒の人など、社会保障は最低限しかないけれども、生きていかなければならない人たちの権利の擁護にあります。しかも、医師のように薬物を使うとか、心理士のように深層をさぐるとかするのではなく、壊れても、潰れても、ありのままにその人を受け止めたうえ、その人の未来に光を当て、徹頭徹尾、寄り添い続けようとしています。生活保護や障害者手帳の申請など、公的機関への手続きも業務に含まれます」



「正直いえば、私自身もよくわかりません。一五歳の少女がただ『タバコを吸ったのか、吸わなかったのか』『男の人とつき合ったのか、つき合っていなかったか』とか、そんなことに多くのオトナが狂乱した騒動、といえいいのでしょうか。当の主人公である少女は渦中の人物でありながら、あっという間に遠くへ放り出され、私とは関係のないところでずっと騒がれていたように思います。困るのは、私の評価に対する切り口が、いつもこの騒動のほうからくることです。慶應に入ったときも、『よくここまで更生したね』とほめられて、なんと答えていいのか困りました(笑)」「十代の終わり頃、とても身近な友だちが二人自殺しました。同じ時期、かわいがっていた猫も死にました。そして私は、結婚するまでの三年くらいの間に、リストカットを繰り返しました。『死のう』というより『向こう側に行こう』という感覚で。不思議な感覚だけど、『もうここでやることはないよね』という気持ちでした。ラクになろうとしているのは確かだったと思います。また、二二歳のときに産んだ長女は、重い心臓病を抱えて生まれてきました。心臓に五つの変形があり、移植の話が出るくらいでした。いつ死んでもおかしくないという状況の中で、いろいろ考えました」

「こういうとそっけない、冷たいと言われるかもしれませんが、命はある日、暴力的なかたちで奪われるものです。人は、いつか、突然、死ぬ。覚悟して、覚悟して、そうしても、奪うように命は失われていく」

「震災についていえば、身内を失った子どもの将来が心配です。ケアが必要です。人は本当に悲しいとき、つらいときは泣けないものです。動物は震えているだけです。大きな衝撃を受けたときの生物のプロテクト方法です。何かを感じないようにしているわけです。それがしこりのようになって、ふっと、あるときに外部に出る。これがいわゆる PTSD です。たとえば、リストカットしたり、精神疾患になったりすることもあるし、息苦しきになることもある。息苦しきは、津波などによる呼吸困難のイメージです。本当のトラウマは、自分の内部で無意識にブロックしているから、オトナになって、ふとした瞬間に出てくる。いつ出てくるか、どんなトラウマか、本人にもわかりません」

「私の世代は、『一億総中産階級』と言われ、インスタント食品、鍵っ子、暴走族、竹の子族、受験戦争といったキーワードに象徴される時代の中で育ってきました。社会が右肩上がり成長し、終身雇用制

度をはじめとして、国民健康保険、国民年金などの制度も整備されました。いい大学に入り、いい就職をすれば、一生安泰という夢。女性は女性で社会進出をはじめ、どんどんきれいになって、どんどん自立していくような夢を見ることができた時代です。少子化傾向もはじまり、受験での勝ち組と負け組がはっきりしてきました。私の世代はその落とし子です。人間には帰属意識が必要なのですが、鍵っ子には、帰属する場所がなかったといえます。そして、その結果としてのディスオーダーズ。家族のつくり方がわからない、人間関係の育み方がわからない、という人たちに対して、何かを教えるというよりも、まず、『勉強の仕方』を教えるようなことをやっていきたいと考えています」

**オマケ：**10月27日（土）、阿佐ヶ谷ロフト（Loft-A）で「第4回鈴木邦男生誕祭＜延長戦＞」をやる予定だった（企画・進行=白井）。出席者として、ジャーナリストの斎藤貴男さん、森達也さん、青木理さんなどを呼び、原発報道の問題点を議論するはずだった。しかし、前週に若松孝二監督が事故死。急遽、若松プロの許諾を得て、監督の追悼イベントにした。監督の盟友・足立正生さんや、元・赤軍派議長・塩見孝也さんなどに集まっていただき、思い出を語り合った。

## ● 石塚 隆記

### 1◆STEVE JOBS、WALTER ISAACSON 著、Simon & Schuster

最初は分厚いハードカバーを買ったのであるが、持ち運びできないし、結局誇りをかぶらしてしまっていた。でもやはり読みたいので、電子書籍で買いました。iPhoneに携帯電話を変更して、初めて買った電子書籍がこの本であった。

原著者によるアインシュタインの伝記を以前読んでいて感銘を受けていたが、やはり今回のジョブズの伝記からも、そのパーソナリティや私生活を十分に教えてもらうことができた。アインシュタインは、アメリカに住んでいるとき物理を学ぶ学生に向かって、こう言ったらしい、「わからないことは、なんでも聞きなさい。ただし、私生活以外のことに限ること。」。とは言っても、他人の私生活には興味があるし、特に天才と呼ばれる人のものと言ったら特にだ。ジョブズの結婚前のマリッジブルーのくだりなんかからは、ジョブズの間人臭さがプンプンする。

### 2◆リッチマンプアウーマン、フジテレビ、月曜夜9時からのドラマ

小栗旬演じるネクストイノベーションの社長日向が、かっこいい。日向のモデルは、まさにスティーブジョブズ。幼い頃に親と離れた過去を持つこと、若くして経済的に成功したこと、自ら設立した会社を追放され、そして再びその会社に社長として復帰したこと。小栗旬の名演技により、イノベーションの素晴らしさというものがよく描かれている。また、石原さとみ演じるヒロインもよい。



### 3◆平成24年版（2012年度版）環境白書、環境省編

なんとなく環境省白書を読んでいて思ったのは、ごみのこと。2010年度の日本全体の一般廃棄物の発生量は4,536万トン/年。うち、食品廃棄物の発生量は、1,532万トン/年。一般廃棄物の約3分の1が、食品廃棄物。さらに、ここで私は驚いたのだが、この食品廃棄物の発生量のうち、1,374万トン/年が焼却・埋立処分されている。食品廃棄物は、有機物であるのだから、コンポスト化されとか、バイオガス化されとか、燃やすか埋めるか以外に使い道ありそうだし、実際はもっと使われていると思っていた。実態を知れたというのはよかったのだけれど、もっと食品廃棄物の削減、または、有効利用が進めば良いなど数字を見て改めて思ったところです。

#### ● 中田 哲也

それぞれ詳しくはブログで紹介していますので、ご関心があればご覧下さい。

#### 1◆ [書籍] 山下惣一、中島正『市民皆農—食と農のこれまで・これから』（2012年7月、創森社）

<http://foodmileage1.blog.fc2.com/blog-entry-149.html>

佐賀・唐津の農民作家、山下惣一さん（76歳）と、岐阜・飛騨の自然卵養鶏家、中島正さん（92歳）との往復書簡集。3.11と原発事故を受け、農魂・百姓スピリットの復活と「市民皆農社会」へのシフトの必要性が、熱く訴えられています。

#### 2◆ [映画] 『よみがえりのレシピ』（「よみがえりのレシピ」製作委員会）

<http://foodmileage1.blog.fc2.com/blog-entry-132.html>

山形県庄内地方で在来作物を守り継ぐ人達（高齢農家、戻ってきた後継者、食農教育に携わる先生と子ども達、大学の研究者、イタリアンレストランのシェフ、一般の消費者等）の様子を、滴るような美しい映像で描いたドキュメンタリです。

#### 3◆ [落語] 立川吉笑さん創作・自演『大根屋騒動』

<http://foodmileage1.blog.fc2.com/blog-entry-107.html>

若き天才・立川吉笑さん（二ツ目）による創作落語。江戸の町を舞台に、練馬大根、亀戸大根、伝統大蔵大根（いずれも江戸東京野菜）等の販売合戦が繰り広げられます。笑いを通じて、広く一般の方に伝統野菜のことを知って頂くことにもつながります。

## ● 石坂 信之

## 1◆大島堅一「原発のコストーエネルギー転換への視点」(岩波新書) 2011年12月

電力業界や政府筋からは、最も安価な電力は原子力発電だとされています。しかし、最も安価とされる原子力発電のコストは巧妙な嘘に充ち満ちていることを、この本は根拠を示して明らかにしています。原子力発電に経済性がないことは、この本を読めば確信できます。さらに、核燃料処理も、実はもう破綻しているといって良いことも明らかにしています。

本当のところ、原子力関係者も原子力発電に経済性がないこと、解決困難な問題が多すぎることはわかっているのだと私は考えていますけど、原子力関係者(この本では原子力複合体)の力は、利益団体から国や自治体の一部やマスコミにまで及んでいて強大です。原子力複合体の力を解体できるのは、国民の強い政治的関与しかありません。しかし、原発事故を他人事に考えている人たちが増えていくと、結局は原発推進に手を貸すのではないかという恐れを私は感じます。原発事故が起きなくとも、早晚、核燃料処理や原発のコストで破綻するのでしょうか、誰がその破綻を背負っていくのでしょうか。今の原子力複合体やら政府、あるいは一部のマスコミがその破綻を背負うわけでもなく、結局は国民に重くのしかかることになるのでしょうか。

著者は脱原発の実現が、私たち自らの「責任ある関与」にかかっている、と結んでいます。なお、この本は第12回(2012年)大佛次郎論壇賞を受賞しました。

## 2◆Newton第32巻第8号「素粒子」(ニュートンプレス) 2012年7月号

または

大栗博司「重力とは何か」(幻冬舎新書) 2012年5月

2012年のビッグニュースにヒッグス粒子の発見?がありました。それを受けて、ヒッグス粒子について解説本がいくつか出版されました。その中でビジュアル本としてNewtonの「素粒子」を取り上げます。ヒッグス粒子の解説に至るまでに、物質を形作っている素粒子をビジュアルに解説しています。この「素粒子」特集では、読者から募った15人のモニターの意見を反映させて作っているそうでわかりやすく、眺めていると、なんとなくイメージできてわかったふりができます。ただ、これらの素粒子に働いている力、自然界の根源的な力を知るには、Newtonよりも「重力とは何か」の方を読まれた方が良いと思います。著者が関わってきた弦理論(あるいは、ひも理論)の発展系の超弦理論が根源的な力の統一を説明できるかもしれない、というところまで読者を引っ張ってくれます。素粒子論という最も難解な景色を新書本で見せてくれるこの本は、とてもおすすめです。

## 3◆十八代目中村勘三郎追悼上映シネマ歌舞伎「連獅子/らくだ」(監督:山田洋次、松竹) 於丸の内ピカデリー 2013年1月

歌舞伎役者中村勘三郎さんが亡くなられ、たいへんがっかりしています。勘三郎さんのエネルギーは歌舞伎だけに留まることなく、現代のエンターティナーとしてどこまで拡がっていくのかドキ

ドキするほど楽しみでした。勘三郎さんほど楽しみながら演じてくれる役者は、もう出てこないのではないのでしょうか。

松竹は、この1月に1週間限りで4つの演目の追悼上映をしました。その機会に私はまだ観ていなかった「連獅子／らくだ」を観覧しました。

古典落語の「らくだ」をご存じの方は、「らくだ」を歌舞伎でやったらどうなるだろう、と想像してください。なじみのない方もおられるかもしれませんので、演目についてちょっと紹介します。フグに当たって死んでしまった“らくだ”の馬太郎（片岡亀蔵）の仲間の半次（坂東三津五郎）は、屑物屋の九六（中村勘三郎）を家主（片岡市蔵）のもとに使いに出し、通夜の酒肴を出さないと、死人を担いで踊らせるぞと脅します。ところが家主は、死人の踊りは見たことがないので見たいものだと言い出し、まったく取り合いません。これを聞いた半次は“らくだ”の遺体を嫌がる九六に背負わせて、2人で家主のもとへ向かう……という内容です。観客は話の“めちやくちゃさ”とこれを演じる役者達に大笑いです。シネマ歌舞伎は実際に演じた舞台公演を最先端のカメラで撮影し、スクリーンで上映していますから、公演の観客と映画の観客が笑いの渦に包まれます。

幸いなことに、この3月から5月までシネマ歌舞伎のすべてが東劇で上映されますので、興味ある方はご覧ください。どれもなかなか楽しいのですが、特に勘三郎さんの演目（「野田版鼠小僧」、「らくだ」など）はおすすです。

## ● 桑垣 豊

### 1◆『原爆投下 黙殺された極秘情報』松木秀文、夜久恭裕 NHK出版 2012年 1600円

この本は、アメリカ軍による原爆投下が、事前に予期できたのではないかという疑問に答えようという意図で書いたものである。2011年8月6日にNHKスペシャルとして放映したものに追加情報を加えて、本にしている。番組づくりには、私も情報提供という形で協力をしている。

この本の結論は、事前に原爆投下を予期できた可能性が高いのではないかということである。そして、その予期に基づいて投下を阻止することさえ可能であったという。根拠は、アメリカが原爆開発をしているらしいという外務省の情報が一方にあり、もう一方にテニアン島にいた原爆投下部隊の動きをつかんでいた参謀本部の活動がある。私の結論は異なる。世界最初の原爆投下である。かなりうまく連絡が取り合えたとしても、予期するのはむずかしい。今、私たちは原爆投下という大きな歴史的事実を知っている。どうしても、わかるはずだと思いがちである。

では、2つ目の長崎原爆はどうか。この本は、広島原爆を見ている以上、阻止できた可能性は高いと見る。私はそうは思わない。いや、2つ目の原爆はまず小倉を目標として3度挑戦して、うまくいかなかったということを考えるべきである。失敗の原因は、前日、アメリカ軍が通常空襲を八幡に対して行なったために、その焼けた煙が残っていて、目標がよく見えなかったからである。また、日本軍の高射砲攻撃や迎撃戦闘機が上昇してきたことも、アメリカ軍側に記録がある。

みなさんは、日本軍の高射砲や迎撃戦闘機的能力では無理だと思うかも知れない。しかし、八幡にあった最新鋭の高射砲は、高度1万5000メートルまで届き、陸軍5式戦闘機も1万メートル程度まで上昇できるものがあった。残念ながら、私の提供した情報にもとづくこの部分は、NHKスペシャルでも、この

本でも出てこない。証言映像がなければ、番組にはならないという映像づくりの限界である。NHK スペシャルという高い昨品性を求めるものでなければ、短いナレーションをいれることができただろう。

長崎への原爆投下は、燃料ぎれ間際に1回だけの攻撃でたまたま市街地に落ちたために「成功」したものである。しかも、黙視攻撃すべきところを、命令違反のレーダー映像だけで投下した。私の結論は、小倉攻撃は阻止できた。長崎は偶然「成功」したにすぎない。というものである。長崎方面に原爆搭載機が向かったのはわかっていたらしいが、小倉-長崎間は、B29で20分である。連絡を受けて、高度9000メートル程度まで上昇して迎撃できるであろうか。途中で方向を変えて、別の目標をねらうかもしれない。

番組の最後に海軍の名パイロット本田稔氏が登場する。これも私が示唆した情報に基づく。本田氏は、当時、長崎に向かうB29のルート上にある海軍大村航空隊で、海軍の最新鋭戦闘機「紫電改」で防空任務にあたっていた。当然、本田氏の立場としては、出撃命令ができれば、体当たりしてでも原爆投下は阻止できたのではなかないと思うしかない。しかし、かなり難しいことは本田氏も指摘していた。小倉にB29が出現した時点で上空に向かえば可能かもしれないが、当日長崎付近は曇っていた。こういう日はB29も来ない可能性が高く、視界が悪ければ防空任務もむずかしい。小倉の迎撃戦闘機は、上空付近に45分間もB29がいたから発進することができたのである。なお、本田氏は8月6日の広島上空を飛行中に原爆が炸裂して爆風を受け、紫電改が墜落する可能性もあった。その体験談は、この番組の見所である。

予期できたかどうかは解釈の問題であるから、きびしい立場をとれば可能であったと言えないこともない。では、NHKはこのようなきびしい立場をとりえるのであろうか。私はあまりにもハードルが高すぎて無理だと思う。

この番組を制作した松木さんから、2011年の大震災直後にメールをいただいた。広島放送局に所属しているが、福島原発の取材に動員されているとのことであった。何かアドバイスはないかと聞かれた私は即座に「赤外線カメラで福島原発の表面温度を測れば、内部の様子が推測できる」と答えた。松木さんはいいアイデアなので担当に伝えるということだった。それに対するNHKの対応は「30キロ圏外からの撮影なのだが、赤外線望遠カメラがないから無理です」というものであった。私はすかさず「動画カメラは画素数が少ないから無理かもしれないが、静止画カメラでとれば分解能としては可能。分解能が足りなければ、何度も同じ場所を撮影して情報量を増やせば可能」と答えたが、返事はなかった。世界最高の映像処理技術のあるNHKにできないはずはない。と言いたいところだが、初めての原発事故、よくわからない赤外線解析の意味、なかなか有効に生かすことはできなくて当然である。

もし、原爆投下が予期できたとするなら、30キロ圏退避の前に上空に取材用の飛行機を飛ばして、赤外線映像をとるぐらいのことはしていただきたい。そうすれば、高層ビル用の消防車を福島原発に派遣して、原子炉建屋の上から海水を放水することで、メルトダウンや水素爆発を阻止することさえ可能であった。私は、当時このような内容があるメイリングリストに流した。放射冷房の研究者としては、このようなことは当然思いつく。さて、みなさんはどう思いますか。

## 2◆「黒船に立ち向かった男たち」2011年放送（2012年再放送でみる）

『NHK BS 歴史館 常識逆転！の日本史』所収 NHK「BS 歴史館」制作チーム編 河出書房新社 2013年 1200円

1854年の日米和親条約、1858年の日米修好通商条約は、いずれも日本側優勢で決まった条約だった



という内容。常識では、日米和親条約で開国させられ、日米修好通商条約で不平等条約を結ばされたということになっている。

番組では、日米和親条約で、長崎に加えて下田、函館を開港するが、薪の補給などをするが貿易は断ったことを紹介する。交渉にあたった昌平坂学問所の林大学頭（はやしだいがくのかみ：学長のこと）は、ペリーの恫喝には屈せず、むしろオランダから得た事前情報によって有利に交渉を進める。

日米修好通商条約では、領事裁判権など不平等な点もあるが、関税は20%でそれほど低いものではなかったという。関税が5%になったのは、下関で長州藩が外国船に無差別砲撃を行なったためだという。交渉にあたったのは、外国奉行岩瀬忠震（いわせただなり）で、こちらもオランダからの情報に基づき、有利に交渉を進める。

結局、幕府外向は弱腰だったというのは、明治維新政府のプロパガンダであったということである。しかも、不平等条約の原因をつくったのは、明治維新政府の主要な閣僚を出した長州藩であった。今も幕末に関しては、片寄った歴史感が蔓延している。薩長史観も幕府史観も片寄っているが、いまま薩長史観によりかかって、「維新」を名乗る政党などが登場するのは、悲劇ではなくて喜劇である。

なお、放送内容が本になっているが、黒船以外の話題はあまりおすすめできない。

### 3◆『戦後史の正体 1945-2012』孫崎享 創元社 2012年 1500円

話題の書である。ある知り合いは、今に至るまで日本政府がアメリカの強いコントロール化にあることだけで歴史を見るのは一面的であるという。しかし、著者も私も一つの観点だけいいなどと言った覚えはない。アメリカの影響下にあることに故意に目をそむけている。むしろ、アメリカの影響を積極的に利用して自分の権力を維持しているのではないか。そこがポイントである。別に孫崎氏の意見に同調しないといけないとは思わないが、戦後史の重要な事実がこの本から見えてくることは確かである。もっと、自分の頭で考えないといけない。

なお、孫崎氏のほかの著書を見ても、経済だけは、あまり、おわかりではないようである。それは、世界情勢についてネットで有名な田中宇（さかい）氏も同様。理由は、経済学があまりにもでたらめであるから、勉強のしようがない。まともな経済学は、日銀などの官庁や民間の経済研究機関の一部にあるが、学問として体系ができていない。そうでなかったら、設備投資過剰の日本で、投資をしやすくする金融緩和が逆効果であることはすぐわかるはず。理不尽な要求に耐えられなくなって、日銀総裁は早期辞任を決めた。この話題はまたの機会に。

## ● 秋山 和男

今回おすすめする3冊には市民科学研究所の関連した書籍や活動、情報と結びつけたものを入れる工夫をしてみた。結果、3冊ではなく、3項目となることをお許しください。

## 1 ◆ リスクに対する考え方の幅を広げてくれたもの

\* 『構造災——科学技術社会に潜む危機』（松本三和夫著 岩波新書 2012）

\* 『医学と仮説——原因と結果の科学を考える』（津田敏秀著 岩波科学ライブラリー 2011）

『構造災』では、福島原発事故を天災、人災という形で捉えるのではなく、科学と技術と社会をつなぐ複数の制度設計や複数の主体が織りなすしくみの機能不全に由来する失敗として、松本氏は「構造災」と定義した。それを過去の諸事例をもとに具体的に説明している。

社会や技術の問題への対策を考える際、多くの場合費用（コスト）と便益（ベネフィット）の分析の方法を使う。この時、便益が一定の場合は対症療法の費用の方が、本格的な解決を行うより費用が常に桁違いに低いと想像できる。そこで、対症療法を選択する。

さらに、①初期費用効果 ②学習効果 ③ネットワーク効果 ④信念の効果 というものが、構造災が発生するメカニズムにあると。それは、技術選択だけでなく、制度一般についても同様で、制度の形成、発展、存続、衰退の過程で、貢献すべき目標を失ったのちも、既得権益を抱え込んだまま制度が存続する。先例が明らかに間違っているのなら、先例を踏襲し続けることをやめるべきだともいう。

①初期費用効果とは、技術が投入された初期費用が巨大ならなおさら。②学習効果とは、ある技術を使い続けると他の技術に切り替えることが困難に。③ネットワーク効果とは、ある行為者の意思決定が他の行為者との関係に影響されること。④信念の効果とは、特定の認識内容が根拠の有無に関係なく行為者の思考や行動に影響を及ぼすこと、だそうだ。問題があると指摘する人がいても、例えば、「空気が読める」かどうかという別だでのカテゴリーを持ち出して顧みられない。このことは、市民研で紹介してもらった、『原子力防災——原子力リスクすべてと正しく向き合うために』（創英社・三省堂 2007）の松野元氏を排除した組織のことに通じると思った。

対症療法を選択するという点に関連して。上田昌文氏は『わが子からはじまる原子力と原発きほんのき』（クレヨンハウス 2011）に、原子力と名のつく特殊法人等20を挙げ、もちろん原子力安全委員会、原子力安全保安院も入っている。「原子力推進のアクセル役に対する、いわばブレーキ役をきちんと機能できるようにしてこなかったために、実際の重大事故が起こったときにうまく対応できずに混乱している」と。ある課題が見えてくるとそれに対応する組織が作られる。また、別の課題が生じれば、新たに別組織が作られる。つまり、全体の組織や構造を見直さず、対症療法で処理して、複数の制度設計と複数の主体が存在することで機能不全を起こし、結局重大事故が起こったとき、きちんと機能しなかったのだろうか。

2013.2.13の上田氏のメールで『レイト・レッスンズ—14の事例から学ぶ予防原則』という本を知った。さっそく図書館に予約し手にした。「予防原則」の考え方を知った。そこで『医学と仮説—原因と結果の科学を考える』で紹介されていたものは、予防原則の事例だったんだと気付いた。一つは水俣病の例。1956年水俣湾内産魚介類が原因食品と分かった段階で食中毒と同じ対処（原因が特定できなくても行動

する)すれば、水俣病患者は50人程度だったという。また、1994年に国際がん研究機関でピロリ菌が胃がんの発がん要因の最高レベルと結論づけられたのに、国立がんセンターは、直接的な証明がないので、さらに日本で追跡調査をすることで、十数年間国立がんセンターが必要な対応しなかったことなどだ。

この本で私が一番心に刻まれたのは、いわゆる帰納法、演繹法に関連することだ。

「科学の営みは、個別の観察から仮説を創出する。仮説に基づいて個々の現象を多数観察する。さらに、仮説に基づいた観察を記述し分析して一般法則や理論ができあがる。その法則や理論を個別事象に適用する」。科学の営みは、このように個別の現象と理論との間を「ぐるぐる回っていることになる。一応進歩しているはずなので、・・・スパイラルに上昇していると言えるだろう」。いまさらと思うだろう。しかし、実はこれが現場で行われていないのだ。例えば、福祉の現場で活動していると、本から得たものの捉え方も参考に話すと、現場にいる人で嫌う人が多い。押し付けるわけではないのでちょっと耳を傾けてもいいのではないかなと思う。理論が現実の場面に適用され、それが現実の場面で修正され、新たに修正された理論が生まれる。このようにして、よりよいものを作っていけばよいのに。そんな社会になればいいと日々感じている。

## 2◆多くの人が持っているイメージを科学的に捉え、改めていく研究と活動

\*『わかりやすいEBNと栄養疫学』（佐々木敏著 同文書院 2005）

\*『森の「恵み」は幻想か——科学者が考える森と人の関係』（蔵治光一郎著 化学同人 2012）

佐々木氏は、市民科学研究室主催の講演会で2011年春に講演予定だった方で（震災のため急遽中止になった）、『森の「恵み」は幻想か』は、市民科学研究室 ML で森川浩司氏の「新刊ピックアップ」で紹介されたものだ。

肉を多量にとるフランス人に通常なら多発するはずの心筋梗塞が統計的に少ない、この逆説現象の原因は赤ワインを飲むからだと言われている。いわゆる「フレンチ-パラドックス」だ。ところで、佐々木氏は、『わかりやすいEBNと栄養疫学』で、日本人がフレンチ-パラドックスを信じ、赤ワインを健康のために選んで飲むならば、それは、一面的な科学的根拠をもとにしたものだ。西ヨーロッパ15カ国でワイン消費量と心筋梗塞死亡率の関係をみると、消費量の多い国の方が死亡率が低い。だからワインは心筋梗塞を予防する可能性がある。だが、ここに日本のデータを入れると、日本ではワインをあまり飲んでいないにも関わらず、心筋梗塞の死亡率が西ヨーロッパ諸国と比べ少ない。だから日本人の場合はワイン以外に予防する何かがあるのだから、それをヨーロッパに伝えた方がよい。一方で、ワインに含まれるアルコールは咽喉と食道がんを増やす危険がある。このように、佐々木氏は「たくさんの人の生活習慣や健康状態などを調べる学問、疫学と、科学的な根拠に基づいて物事を判断（EBN）」する「栄養疫学」の必要性を説いている。

さて、『森の「恵み」は幻想か』には、次の例があった。砂漠の植林では、地下深くから水を吸い上げる力のあるユーカリが代表的に使われる。しかしこのような木は、地下水をくみ上げるので、地下水位が低下し、周りの人間に水不足をもたらす可能性がある。植林は100%よいことだという「植林神話」は科学的であるべきだという。この本で森をよく理解させてくれたのは、森がおのずから行う「森の作用」と人間に益をもたらす「森の機能」を分けて語られているところだ。紙面の関係で詳しくは書けな

いが、一つだけ挙げれば、私たちは山や大きな公園で急な雨にあったら、枝の張り出した木の下で雨宿りする。これは、雨水が葉や幹に一時貯められるから、雨が地面にあまり降り注がない。その水が葉や幹から直接蒸発する「樹冠遮断作用」がある。「樹冠遮断作用」は、森にとっては地表に降る雨を少なくする。だから、森に保水力を求め、河川の流量を確保するためには、適切な間伐をする必要があるという。

### 3◆精神疾患の診断が行動や症状から行われていることから起きていること。将来的な変化の可能性は？

\*『子どものそだちとその臨床』（滝川一廣 著 日本評論社 2013）

\*『精神疾患の脳科学講義』（功刀 浩 著 金剛出版 2012）

滝川一廣氏の『子どものそだちとその臨床』は、実にやさしいまなざしで精神疾患の子どもたちを見つめているのが分かる。また、発達障がい児童等が増えている背景に社会や文化の変化・複雑化・多様化・高度化、そして貧困等も関連していると指摘している。

さて、ここでは、精神疾患の診断が他の身体医学とは異なることを伝えたい。近代医学は①病気の原因、②病気が起きている身体部分（病巣）、③病気の仕組み（病理）から、診断する。しかし、「多くの精神疾患は、社会的な対人交流におけるなんらかの失調や困難性として現れてくる。そこにこそ患者の苦しみや生活困難がある」。「精神疾患の『症状』のほとんどが主観的なもの（幻覚や妄想、抑うつ気分など）なので、患者の示す社会的な言動を手がかりに判断するほかない。そこでその判断がどの医者でも一致するための標準化されたチェックリストとして作られたのが DSM であった」（242 頁）。DSM とはアメリカ精神医学会の診断マニュアルである。「あくまでも患者の『行動』（ふるまいや陳述）のあり方によって病気をとらえ分けている。これこれの行動がこういう組み合わせで揃えば『〇〇障害』とするように、その組み合わせは『症状』とみなされる行動からなっている」。例えば、「ADHD という医学診断は、『中枢神経系』のあり方ではなく、あくまでもその子どもの『行動』のあり方によってのみ下されている」（47 頁）。そこでの治療は、例えば心理分析家は精神分析、行動療法家は行動療法で。治療効果は精神疾患そのものが対人的な失調なので、治療技術だけでなく心理療法家との相性も関係するという。

一方、『精神疾患の脳科学講義』で、功刀浩氏は、「精神栄養学」の成立と展望を述べている。詳細は省くが、「うつ病」と栄養学では、うつ病は環境要因が病因の重要な役割を果たし、慢性的なストレスによって生じる。慢性ストレスで副腎皮質から分泌されるストレスホルモンが過剰となる。そのために、神経栄養因子の機能低下があり、次に海馬等の傷害に、さらに、ストレスホルモン制御障害を起こし、うつ病になる。治療は心身の休養、認知療法や、抗うつ薬、食生活習慣改善によって神経栄養因子機能増強させ、海馬等の修復・ニューロン新生によって治癒する。n-3 系不飽和脂肪酸は脳で重要な役割を果たし、海馬などで脳由来神経栄養因子の発現を高める。この神経栄養因子は、神経細胞が活動すると分泌され、その神経細胞や周囲の細胞に栄養を与え、さらに活動を強化する。また、ニューロン新生も促進する。精神疾患に関連する栄養素は多数あるという。

さて、まとめである。現状では精神疾患診断の限界を知った上で、発達障がいや ADHD、LD のこと、その他の精神疾患について理解すると、少なくとも当事者にマイナスにならないサポート等が行えると考える。また、栄養や食品と精神疾患との関連が分かってきたこと。さらに、この精神栄養学といった



学問では、未解決かつ興味深いテーマも無尽蔵にあると、功刀氏はいう。このこと一つとっても、精神疾患の診断も治療も変化していく可能性を感じる。

## ● 上田 昌文

「私のおすすめ2012」でとりあげる作品は、2012年の「私」の体験をふりかえって個々の体験の意味深さを私自身ではかりなおすことの結果であるだろうから、「おすすめ」を読む読者にしてみれば、「その筆者（この場合は上田）はどんなふうにしてその1年をとらえたか」をそこから感じ取ることができ、そのことを通して読者自身の1年をふりかえってみることもなるだろう。また、とりあげられたその作品たちを、「おすすめ」するその文章にひかれて手にしてみることがあるとするなら、それを読むなり聴くなり観るなりすることで、筆者と読者の体験の共有化ができることになり、場合によっては、両者の新たなつながりの創造となるだろう。前者は「こんなものを読んでいるんだ」と読者を感じさせることができるかどうか、後者は「これは読んでみたいな」と読者の触手を引き出すことができるかどうか、である。いずれにしろ、筆者の選択眼と文章力が決め手になる。「おすすめ」が侮れないわけがここにあるし、多くの人に（この場合は会員さんに）呼びかけてもなかなか書いてもらえないわけもこのへんにありそうだ。

### 1◆フィリップ・ボールの三部作『かたち』『流れ』『枝分かれ』（早川書房2011～2012）

私はNHKBSなどで放送される「自然」「紀行」系ドキュメンタリーが好きで、ずいぶん前からこまめに録画して、休日などに家で食事をしながら再生して観ている（それでも録りためたものの10分の1も観きれていない）。2012年も「[フローズン・プラネット](#)」のシリーズなど楽しませてもらったものがたくさんある。それらを観ていていつも思うのは、「ものや現象や生き物の“かたち”は何で決まるのだろうか、どうやってできるのだろうか」ということだ。ものや現象や生き物の「形態」と「機能」は切り離せないのだが、「機能」という目的性を実現するために、「形態」が徐々に生成され、ついにはそれが、他のものと区別して認識できるだけの、でも他のものとの協調の網目を組み上げながらの、個性・個性性を確立する（そしていつかはそれらが消滅・死滅する）。私にとってはこの世の中で、このような視点で、地球の自然の事象、物体、生物を眺めることほど、興味深いことはない。

私は、私が最も好きなサイエンスライターのフィリップ・ボール氏には会ったことはないが、きっと彼はこのような感性を精神の隅々にまで行き渡らせている人のように思える。『H2O 水の伝記』（ニュートンプレス 2000）で出会って、その本の素晴らしいことを何人もの人に私は語ってきたが、2012年はいよいよ彼の本領を発揮した3冊（そしてプラスもう1冊）を一気に読むことができ、改めてその視野の広さ、数理的な事柄を咀嚼して日常的な語り口にもっていく能力の高さ、そして読む者をしてめくるめく事例に次々出合わせる名ガイドぶり、に感心した。『かたち』『流れ』『枝分かれ』はそれぞれ、生物、流体、無機物を、豊富な図版を用いて、それらのパターン形成の不思議に迫った極上の読み物である。

物質科学、地球の生成や気象、生物の進化や発生や生態や行動、ひいては経済に及ぶまでの幅広い現象に共通したなんらかのパターンの生成原理を解明しようとする、いわゆる「複雑系の科学」が今も進展中だが、上記3著は、複雑系が扱うべき最も基本となる現象に科学がどう迫っていこうとしているかの格好の案内とも言える。

複雑系の科学がどういう方法で何を明らかにしようとしているかを概観するには、私が読んだものの中では、『ガイドツアー 複雑系の世界: サンタフェ研究所講義ノートから』(メラニー・ミッチェル著/紀伊国屋書店 2011) が一番面白いと思う。

フィリップ・ボールにはもう一つ、私にとっては底ぬけに楽しい本がある。分厚い本だが読み出したらやめられないとはこの本のことで、その名は『音楽の科学 音楽の何に魅せられるのか?』(河出書房新社 2011)。「なぜ音楽は人の心を動かすのか」—この世で最も神秘的で解きたい疑問のようにも思えるこのテーマを、これほど多様な方面からの科学的アプローチで迫ろうとした本は他にないだろう。音楽を愛するどんな人も、その人なりに「サイエンス」の面白さを楽しめる、じつに得難い本になっている。

なお、音楽の本といえば、2012年に読んで忘れがたいのが、『20世紀を語る音楽(上)(下)』(アレックス・ロス/みすず書房 2010)だ。20世紀の作曲家にまつわる興味深いエピソードが目白押しで、ここから何か統一的な歴史の解釈を見出すのは難しいが、若い著者がよくどこまで事実を拾い、ジャーナリストにまとめあげたものだと感心する。

さらにもう一冊、音楽の本で付け加えるなら、2012年に亡くなった音楽評論家の吉田秀和氏を悼んで、どうしてもあげておきたいものがある。『私の好きな曲』(ちくま文庫 2007)だ。西洋クラシック音楽の大作作曲家とその楽曲を語ってこれほど明晰でありながら心に染み入る(まるで取り上げているその曲そのものが聞えてくるような)日本語の文章は他にはないのではないか。20年以上前に単行本を手にして以来、何度繰り返して読んだかわからない、“私の好きな本”、である。

## 2◆『日本の聖域』(「選択」編集部編/新潮文庫 2012)

先の項にあげた翻訳書はどれも高価だが(私はそれを避けるために古本屋で買ったり、英語の原書を買ったりしてなんとかやりすごしている)、この文庫本は安い(定価で590円)。しかし中身は、どうしようもないくらいに“重い(安っぽくない)”。次の目次を見てほしい。[これらの章](#)を、それぞれの分野の取材に長けていると思われるジャーナリストが匿名で書いている。宣伝文にはこうある。

「国民は知らない。自分たちの財産を食いつぶす輩がいることを。新聞やテレビが報じることのできない闇があることを。しがらみにまみれ、権力、利権、欲望渦巻く日本の病巣——。中央官庁、司法、医療、教育など、国民生活に密接するこの国の中枢で何が行われているのか? 26の組織や制度のアンタッチャブルな裏面に迫り、その知られざる素顔を暴く。会員制情報誌「選択」の長期名物連載。」

私は常々、人間の中でもっとも軽蔑すべきは、国民の税金を食いつぶそうが何になるうが(後は野となれ山となれ)、“エリート”として得た利権だけは死守して、自らの安住安泰をはかる、蛆虫のような、あるいは白蟻のような、“顔の見えない”連中だ、と思っている。小心翼翼、高貴な志などそうした連中に望むべくもないが、利権集団の鉄壁に守られていて、彼らを一掃するのは非常に難しい。『日本の聖域』は、その鉄壁を穿つものではないが、メスを入れるべき病巣がいたるところに広がっている日本の腐敗の現状を、印象深く点綴している。

東日本大震災を経て、福島原発事故を経て、日本はまともな国になっていけるのか、そのためにはどこをどう変えなければならないのか—この文庫本を読みながら、怒りを込めて、多くの人にそうした問題を改めてみすえてほしいと思う。

なお、こうした社会悪とその病巣に迫る別の方法の一つは、おそらく文学だと思えるが、私の印象で

は、バブル期以降、日本では文学のこうした面での力がひどく衰弱してきている。それは次の項で扱う作家、デュレンマットに典型的にみられるような鋭い風刺・諧謔の力を遺憾なく発揮する作品が、日本文学から姿を消したように思えることにも表れているが、それ以前に、例えばかつての流行作家、松本清張にみられるような“社会派”の存在さえいまや風前の灯にあるような気がしてならない。あるきっかけで松本清張の『ミステリーの系譜』というノンフィクションを読み（全集第7巻、文藝春秋）、そこに収められていた短編集『別冊黒い画集』がひどく面白かったので、彼の短編集を数冊（『黒い画集』『張り込み』『黒地の絵』『黒の様式』など）一気に読んで、その思いを新たにした。文学が持ち得る根源的な社会批判力という点からすれば、私には、パラパラとしか読んでいないのでこういって生意気なのだが、大人気の村上春樹も、ノーベル賞をもらった高名な大江健三郎も、読んでも得るものが少ない、どこか衰弱した文学であるように思われる。

なおこれは余談だが、文章のうまさ、の点で戦後の作家でずば抜けている人の一人は、ひょっとしたら、倉橋由美子かもしれない、と最近感じ出している。晩年の幻想短編連作『定本 酔郷譚』と比較的初期の不可思議な恋愛小説『暗い旅』（いずれも河出文庫）、卓抜で辛辣な小説論『あたりまえのこと』（朝日文庫）……全作品を前にしてほんのわずかを読みだしたばかりだが、高い教養を宿しながらの平明達意の文章がきわめて心地よい。この先読み続けていくのが楽しみな作家の一人だ。

### 3◆フリードリヒ・デュレンマット『失脚／巫女の死 デュレンマット傑作選』（光文社 古典新訳文庫 2012）

（以下は2012年10月10日に市民科学研究室MLに投稿した「文学の愉しみ、語学の哀しみ……」と題した文章に若干修正を加えたものです。）

2012年の10月5日（金）の夜、ドイツ文化センターにでかけて、「ドイツの古典図書を古典新訳文庫で読む」というシリーズのセミナーの[「デュレンマットの普遍性—スイスから世界を見る」第3回](#)に参加した。新しく翻訳された、スイスの作家、F.デュレンマットの『失脚／巫女の死 デュレンマット傑作選』を記念しての3回連続セミナーで、私は9月末にこの文庫が出たのを知ったので、慌てて第3回に申し込み、足を運んだのだった。

講師（この文庫の翻訳者）の増本浩子氏は、私と同世代のドイツ文学研究者で、留学中にデュレンマットの作品に出会い、この作家の研究を一生の仕事にしようと思いつめられた方だ。『[迷宮のドラマトゥルギー フリードリヒ・デュレンマットの喜劇](#)』（三修社、1998）の著書があり、私はだいぶ以前にこれを買って読んでいたので、著者の話が聞けることへの期待は大きかった。

予想にたがわず、その話は、片言隻句にも耳をそばだてずにはおれないほど刺激的で、日本でのこの作家の研究の第一人者ならではの鋭い考察と、豊富な情報にあふれたものだった。30人くらいの方が集まっていたが、なんとなく、およそ半分はドイツ文学研究者で、あとの半分はそうした先生たちに誘われての学生さん、そしてこの「光文社古典文学文庫カフェ」だからということで参加している人たち、といった具合だと感じられた。

・[セミナー第1回のレポート](#)

・[セミナー第2回のレポート](#)

私がこの作家のことを知ったのは、林達夫と久野収の対談集『思想のドラマトゥルギー』（平凡社）を

ずっと以前に読んだとき、林達夫が、グロテスクな演劇で世を騒がせながら、なんともユニークな演劇論をぶつ、文学の憎めないアウトローみたいな感じでこの作家のことを紹介しているのがきっかけだった。当時翻訳で出ていたもの（それでも数作品だけ）を読んだのだが、それは驚天動地の文学体験というべきか、とりわけ代表作の『貴婦人故郷に帰る』（筑摩世界文学大系第95巻「現代劇集」に入っている、今は絶版）と『物理学者たち』（早稲田文学出版部、今は絶版）には、これほど面白い現代文学があるだろうか、と興奮させられた。ところが、翻訳といたら、あとわずか数編くらいしかなくて、おそらくデュレンマットの全作品の10分の1も訳されていないようなのだった。

しばらくして、英語ではいくらか出ているのかもしれないと思い（当時、アマゾンなんてありません）、本屋で安価で手にすることができたのが、初期の推理小説3編（『裁判官と死刑執行人』『嫌疑』『約束』）と後の『故障』をあわせて一冊にしたペーパーバックだった『The Novels of Friedrich Durrenmat』(PICADOR,1985)。当時の私の英語力では、なかなかすいすいと読み進めるわけにもいかず、苦勞していたのだが、これまた偶然古本屋で見つけたコリン・ウイルソンの評論集『夢見る力 文学と想像力』（竹内書店、河出文庫など）の最後の章でこの4作品が紹介してあって、「これはほんとに面白そうだ」とわかって、一気に読んだのだった。後に、『約束』は早川文庫にも翻訳され、映画（DVD）にもなっていることがわかり、それらも手に入れた。今回増本氏が訳した文庫には、アンチ推理小説としてデュレンマットの本領が発揮されている『故障』が収められている。

この作家が、たとえ翻訳でいくつかの作品を読んだにすぎないにしてもどれほど面白いかは、ここでは詳しく述べないが、私がこのセミナーに参加して痛感したのは、原著で全作品を読めるだけの語学力があることが、どんなに素晴らしいことであるか、である。増本氏は、ドイツ語で出ている全集（36巻になるらしい）が、それらの表紙にはすべて、大の絵画好きであったこの作家の自筆の絵が載せられていること、そして1990年に亡くなったこの作家の家が、「デュレンマットセンター」になっていることなどを教えて下さったが、どんなに興味を覚えたとしても、肝心の著作の全部を読むことは、どうがんばっても死ぬまでにかなわない……なぜなら、ドイツ語の語学力が乏しいから……ということを哀しく思った。

現代文学はえてしてそうなのだ。『チボー家』のマルタン・デュ・ガール（彼の遺作『モーモール大佐』は未完の作品だが、書簡を含めて彼の翻訳の全部を読んだ者としては、フランス語でしか読めないその作品を読むことがかなわないのが残念）、『ドクトル・ジバゴ』のパステルナーク（英語の浩瀚な研究書を含めて、伝記、書簡、詩集なども含めた出版されたすべての翻訳を持っているが、ロシア語は私は一語も読めない）、『白の闇』のサラマーゴ（日本語訳は最近出た『複製された男』も含めて数編出ているものを全部持っているし、幸い英訳がかなり出ているのでそれを集めているが、ポルトガル語は一語も読めず）、『山椒魚戦争』のチャペック（ありがたいことになんかの翻訳がある、しかしチェコ語は一語も読めず）……。好きな作家であればあるほど、原語で読めないことが、やはり残念なのだ。

こうしたことへの救いは、それぞれの作家を研究することに生涯をかけた日本人研究者がいて、そうした方々の著作をとおして、翻訳作品で得た印象を、伝記的な事実や作品分析と照らして自分なりにたどり直し、いまだ翻訳のない作品のことも含めていろいろと想像してみることができる、ということだろう。イプセンの毛利三彌氏（『イプセンの世紀末—後期作品の研究』ほか）、マルタン・デュ・ガールの店村新次氏（『ロジェ・マルタン・デュ・ガール研究』）、パステルナークの工藤正広氏（『パステルナーク研究 詩人の夏』ほか）、チャペックの来栖継氏や千野栄一氏……。増本浩子氏も、若いけれど、こうした研究者の系譜に連なる方だと私は思っている。



たとえ翻訳でしか触れていないにしても、こうした深い共感を覚える好きな作家の作品や思想をとおして、20 世紀という時代をとらえてみることに、そしてそれを自分なりの言葉で語ることに。それは私にとって、死ぬまでに果たしてみたい夢と言えるかも知れない。